

万吉だより

MA GECHI NEWS

第10号 平成21(2009)年3月

吉田格コレクションのこと

立正大学博物館に所蔵している「吉田格コレクション」は、吉田格氏が長年勤務された武蔵野郷土館を退職された平成2年に立正大学に寄贈されたものであり、立正大学博物館創設の重要な資料となったものである。大学に寄贈されて以後2年間をかけて『吉田格コレクション図録』を製作し、既に15年ほどが経過した。

その後「吉田格コレクション」については『館蔵資料「基礎文献」叢刊』として、館蔵資料が報告されている調査報告書をまとめて一書として刊行したところであり、平成20年度には吉田先生の自宅に所蔵されていた写真・文献などの遺品の寄贈を受けたところである。土器・石器などの考古資料のみでなく、関連資料の寄贈を受けたことにより、より充実したコレクションとなっている。

吉田先生には、ご定年以前から立正大学にご出講いただき、文学部の授業で縄文文化の講義を長年行っていただいた。現在までの博物館資料の他館への貸し出しは、吉田格コレクションの縄文資料が中心となっており、年間数件関東各地に貸し出されている。これによって立正大学博物館の存在が一層周知徹底される結果となっており、大学広報の一環も担ってもいるものといえよう。

現在の立正大学博物館は平成14年の創設当時に比較し、博物館に訪れる学生数は極端に減少している。専ら、仏教・文学部という人文系学部が、大崎校舎での4年間教育体制となったことに起因するところである。熊谷校地と懸隔した大崎校地に所属する学生のためには、特別展・企画展のたびに、パネル資料を中心とした「大崎移動展」を開催して便宜を図っており、相応の効果があるものと認識している。

博物館に興味のある学生、博物館学芸員としての就職を希望する学生が大幅に減少した熊谷校地における博物館の存在意義は、博物館学芸員課程と連携した博物館実習の場として重要な任務を果たしているとはいえ、従前より以上の地域社会との連携強化が望まれるところであろう。

館長 池上 悟

第 5 回特別展 「吉田格 縄文文化研究の業績 —吉田格コレクション—」

平成 20 年 11 月 1 日(土)より 11 月 29 日(土)にかけて、第 5 回特別展「吉田格 縄文文化研究の業績—吉田格コレクション—」を開催しました。

立正大学博物館の貴重な収蔵資料のひとつに「吉田格コレクション」があります。「吉田格コレクション」は、吉田格氏〔大正 9 (生)～平成 18 年 (没)] が直接手掛けてきた膨大な発掘調査資料を、ご自身の出身校である立正大学に寄贈して頂いた縄文時代を中心とした貴重な資料です。立正大学の一つの学術的資産として、そして“立正考古”の研究と教育の資料として平成 2 (1990) 年にご寄贈して頂いたものです。

これまで吉田格コレクションは、一般に公開されていない資料でしたが、平成 14 年立正大学博物館の開館に伴い、常設展示にて一般公開されるようになり、多くの方たちに見ていただけるようになりました。しかし、吉田格コレクションの膨大な資料を一堂に展示することは難しく、今回の特別展では、特に吉田格氏の業績に係わる花輪台貝塚、城ノ台貝塚、称名寺貝塚を中心に展示を行いました。

また、平成 20 年度にこれまでの資料に加え、吉田格氏所蔵の写真・図版・書籍などをご遺族の方から寄贈を受けました。そこで、今回の特別展で改めて吉田格氏の業績を紹介しました。

吉田格氏は、昭和 13 (1938) 年立正大学専門部歴史地理学科に入学され、昭和 16 年 12 月繰上卒業、翌年 2 月歩兵第 42・鳥取連隊に応召、昭和 21 年 4 月に山口県仙崎港に帰還・除隊し、同年 9 月日本考古学研究所研究員になりました。その後、武蔵野博物館、東京都立武蔵野郷土館(現江戸東京たてもの園)に勤務され、一貫して縄文時代・先土器時代の研究をされてきました。また、その間に立正大学・東京学芸大学にて教鞭をとられ、多くの学生たちの指導に当られました。

吉田格氏の業績のなかでも、縄文時代早期の花輪台式、縄文時代後期の称名寺式土器の標式土器



第 5 回特別展チラシ

の設定は学界でも広く周知されているところです。

今回の特別展では、これまで常設展示されていた資料に加え、吉田氏によって設定された茨城県北相馬郡利根町に所在する花輪台貝塚の花輪台式土器、縄文時代早期の層位的編年を確認した千葉県香取市小見川に所在する城ノ台北貝塚の資料、千葉県千葉市花見川区に所在する犢橋貝塚出土土器、神奈川県横浜市港北区に所在する表谷東貝塚などを新たに展示しました。

花輪台貝塚は、日本考古学研究所において第 1 次調査(第 1 号竪穴住居跡を調査)が行われ、第 2 次調査は吉田格氏が中心となって行われました。その結果 6 軒の竪穴住居跡が確認され、住居跡ごとの土器の出土状況から花輪台 I 式と花輪台 II 式の土器編年を提唱しました。現在は縄文時代早期の撚糸文系土器の一つの型式に捉えられています。また、城ノ台貝塚は、全国的にも数少ない縄文時代早期の貝塚で、多くの研究者たちによって調査が行われてきました。吉田格氏は、昭和

24・25年に調査を行い、その結果、田戸下層式→田戸上層式→子母口式土器という層位的編年を確認されました。この層位的確認は、戦後の縄文時代早期の研究の指標となりました。

また、吉田格氏寄贈の写真類の中からは、当時の発掘調査の様子などの写真も展示し、当時の調査の様子を見ていただきました。

そして、11月24日（月）に熊谷校舎にて、12月3日（水）に大崎校舎にて「立正大学博物館所蔵の吉田格コレクション」と題して池上悟館長に講演会を行って頂きました。

なお、大崎校舎における移動展を、12月1日（月）～12月20日（土）にかけて行いました。

（内田勇樹 立正大学博物館学芸員）



ジェラード・グロード神父と
（昭和22年秋 左よりG・グロード神父・江坂輝彌氏・信者・吉田格氏（撮影：芹沢長介氏））



板橋区四枚畑貝塚の調査
（昭和13年冬 前列中央後藤守一先生・同列右端江坂輝彌氏・後列右から八幡一郎氏・大友氏・吉田格氏・桑山龍迫氏）



東京都大田区下沼部貝塚発掘調査の様子



神奈川県横浜市称名寺貝塚発掘調査の様子

展示資料の背景 (9)

土師器骨蔵器について

博物館 1 階の常設展示室に入ると右手に、土師器の骨蔵器が展示されています (写真 1～6)。

骨蔵器は、火葬骨を納めた容器のことであり、蔵骨器・骨壺・骨甕・骨櫃などとも呼ばれる。岡山県出土の下道氏の墓誌には「…右二人母夫人之骨蔵器…」と刻まれ、少なくとも奈良時代には「骨蔵器」という用語が使用されていたことがわかります。日本における火葬の初現は、文武天皇 4 (700) 年の僧道昭とされます。骨蔵器に埋納するようになっていき、その後 8 世紀後半ごろを盛期とし、9 世紀代には減少していきます。

写真 1～3 は、昭和 26 (1951) 年 10 月 22 日に神奈川県川崎市有馬、梶ヶ谷 (現川崎市宮前区有馬 7 丁目付近及び梶ヶ谷付近) に位置する畑から出土したものです。

写真 1 の骨蔵器の大きさは、高さ 29.8cm、口径 21.3cm、底径 3.9cm、胴部最大径 21.4cm で、色調は暗赤褐色を呈します。写真 2 の骨蔵器の大きさは、高さ 30.4cm、口径 22.2cm、底径 9.8cm、胴部最大径 25.5cm で色調は暗黄茶褐色を呈します。写真 3 の骨蔵器の大きさは、高さ 28.8cm、

口径 14.8cm、底径 12.7cm、胴部最大径 22.6cm で、色調は暗黄褐色を呈し、胴部外面に一部に煤焼けの跡が残り、底部には径 8.0cm、深さ 5.0mm ほどの打ち欠いた痕跡が見られます。

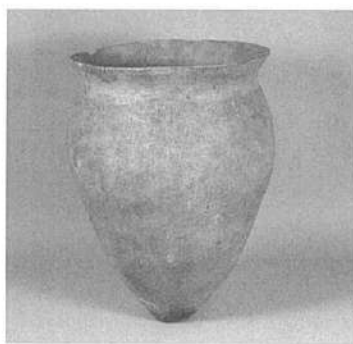
写真 4～6 は、神奈川県川崎市付近で出土したもので、土師器長胴甕を転用したものです。

写真 4 の骨蔵器の大きさは、高さ 32.5cm、口径 16.0cm、底径 6.5cm で、色調は暗黄茶褐色を呈しています。写真 5 の骨蔵器の大きさは、高さ 33.5cm、口径 19.2cm、底径 5.6cm、色調は暗黄茶褐色を呈しています。写真 6 の骨蔵器の大きさは、高さ 34.3cm、口径 24.9cm、色調は暗黄茶褐色を呈し、底部は欠損しています。

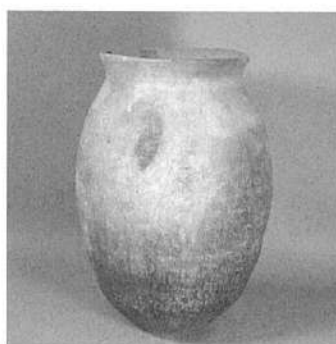
写真 3 の骨蔵器以外は、奈良・平安時代に日常什器として使用された甕を転用したものであるが、写真 3 は口縁部の形状などから、蓋とともに骨蔵器として製作されたものと考えられます。

土師器の甕や壺などを転用して骨蔵器に使用する例は、南武蔵地域 (東京都・神奈川県北部) に多く見られる特色です。

(内田 立正大学博物館学芸員)



1. 神奈川県川崎市宮前区有馬出土



2. 神奈川県川崎市宮前区有馬出土



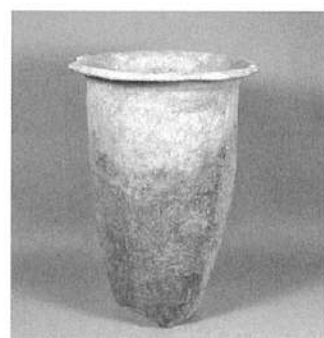
3. 神奈川県川崎市宮前区梶ヶ谷出土



4. 神奈川県川崎市付近出土



5. 神奈川県川崎市付近出土



6. 神奈川県川崎市付近出土

NEWS

資料調査

平成21年3月2日(月)と3日(火)に、梵鐘の継続調査で、和歌山県紀ノ川市粉河町を訪れました。一昨年より調査を継続している粉河鋳物師の調査で、埼玉県美里町安光寺鐘(『立正大学博物館年報』4号で報告)、福島県福島市に所在する粉河松之介鋳物師の作品(『立正大学博物館年報』5号で報告)を調査してきました。

今回の調査で実見した梵鐘は、粉河寺所在の梵鐘です。大きさは、高さ196.0cm、口縁径115.0cmである。粉河寺本堂の向かって右手に所在する鐘楼に懸けられている。鐘楼に掛けられているため龍頭の詳細は観察できなかったが、2頭の龍を合わせ扁平な宝珠を配置している。乳の間には1区内に5列5段、縦帯に2個ずつの計108個の宝珠形の乳がある。

撞座は、径16.0cmで8葉蓮華文で間弁が表されている。その内側には「雌蕊帯」と呼ばれる長さ2.0cmの短い条が28本巡り、その中に蓮子を表した「中房」と呼ばれる中心部がある。

銘文は、池の間・縦帯全体に鑄刻されている。紀年銘は元和4(1617)年で、鋳物師は法華次衛門である。粉川に住む鋳物師かどうか不明とされているが、この粉河寺梵鐘が粉河鋳物師の先駆的な作品とされている。

粉川鋳物師は、和歌山県紀ノ川市粉河町に所在する粉河寺を中心に活躍した鋳物師である。粉河鋳物師の淵源は『粉河鋳物—粉河町内に分布する作品—』(粉河町教育委員会 平成15年12月刊)によれば、海神社金剛峯寺(和歌山県在)蔵梵鐘の康正2(1456)年銘の作品がみられる。この梵鐘には「紀伊国那賀郡浦上御宝前之鐘…」とあり鑄工は藤原末次とある。

また、現在確認できる最古の梵鐘は寛永20(1643)年の明覚寺梵鐘で、鋳物師は蜂屋正勝である。

粉河鋳物師は、江戸時代はじめに粉河寺門前において鋳物業が始まったとされ、おおよそ三つの集団にわかれていたことが指摘されている。一つ



粉河寺梵鐘



撞座

は粉河寺を中心とした集団で、銘文中の鑄工名に「粉河住」と鑄刻している集団である。この集団には、「蜂屋」「福井」「木村」「松村」「藤田」「増井」などの姓がみられる。

もう一つの集団は、銘文中の鑄工名に「粉河(川)姓」を付す集団である。江戸神田を拠点として活躍した鋳物師で、「江戸神田住粉河何某」と鑄刻

している。江戸住の鋳物師は、粉河市正・木村将監・粉河丹後の三家が中心となって関東、東北に多くの作品を遺している。

第3の集団は、紀州と江戸を交流しながら活躍していた鋳物師で、両方に分布が見られる鋳物師である。木村将監や木村三郎兵衛、粉河市正などの鋳物師が挙げられている。

博物館所蔵の半鐘は、『立正大学博物館年報』4号で報告したように鋳物師「粉河市正藤原宗次」の作であることがわかっている。この鋳物師名は、市谷八幡宮（東京都）の「粉河市正三宅宗次」（享保12（1727）年）の名が初見であり、その他に王蔵院（埼玉県さいたま市）の享保17（1732）年の鐘、寛保2（1742）年の安国寺（群馬県高崎市）梵鐘の「粉河市正 藤原宗次」、延享4（1747）年の高源寺（茨城県取手市）の「粉河市正宗次」、寛延元（1748）年の安光寺（埼玉県美里町）の「粉河市正 藤原宗次」などが確認できる。「粉河市正 藤原」姓は最初に宗信がみられ、ついで宗次、国信と続くとされている。宗次は1720年～1750年ごろに活躍した鋳物師であるが、この間にも宗信、国信などの作品がみられることから3代が同時期に活動していたことがわかる。その後、宗信名が最後にみられる寛政8（1796）年以降、国信の名が踏襲されている。国信以降は撞座が定型化していくことから窺える。しかし、このことは江戸神田を基盤とした集団に見られることで、粉河寺を中心とした集団は、主として「蜂屋



粉河寺梵鐘龍頭



龍頭拡大

正勝」が代々襲名され、その他に「松村」「福井」などがみられる。

現存する梵鐘・半鐘が少なく『鐘銘集』などの記録を参考にしながらの考察であるが、今後点在する粉河鋳物師の梵鐘を中心に資料調査を進めていき、粉河鋳物師の集団のあり方を探り、近世鋳物師の実証的な検討を加えていきたいと思う。

（博物館学芸員 内田勇樹）

来館者数

平成20年4月2日（水）～平成20年3月14日（土）

来館者数

4月147人、5月22人、6月232人、7月34人、8月155人、9月57人、10月295人、11月403人、12月8人、1月35人、2月21人、3月15人

計1,424人



見学の様子

来館者往来

〔中学・高等学校〕

群馬県下仁田高等学校・西邑楽高等学校・館林女子高等学校・埼玉県深谷高等学校・誠和福祉高等学校・行田進修館高等学校・熊谷商業高等学校・本庄第一高等学校・菖蒲高等学校

〔団体〕

橘父兄会・立正高等学校父兄会・深谷高等学校父兄・鴻巣高等学校父兄・北本高等学校父兄・熊谷市俳句連合会星座俳句会・長野県同窓会中信地区会・彩の国いきがい大学熊谷学園・熊谷市市制モニター・(財)日本地図センター

出版物

平成 20 年度上半期は、下記の刊行物を発行しました。

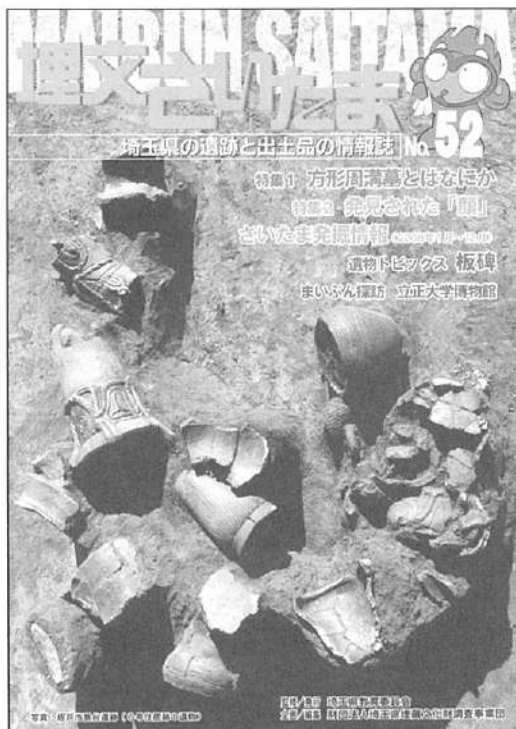
- ・第 5 回特別展図録『吉田格 縄文文化研究—吉田格コレクション—』(平成 20 年 11 月刊)
- ・『万吉だより』9 号 (平成 20 年 12 月刊)

- ・『万吉だより』10 号 (平成 21 年 3 月刊)
- ・『館蔵資料「基礎文献」叢刊第 4 輯 撫石庵コレクション考古資料図録Ⅲ—眞鍋孝志氏寄贈考古資料』(平成 21 年 3 月刊)

掲載出版物

立正大学博物館が下記の出版物に紹介をされました。

- ・「埋文探訪」『埋文さいたま』No.52 (編集(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団/発行 埼玉県教育委員会 平成 21 年 3 月 13 日)



『埋文さいたま』No.52 (埼玉県教育委員会発行 平成 21 年 3 月 13 日) 表紙と紹介ページ

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせていただきたいと思います。

- ・第5回特別展「吉田格 縄文文化研究の業績—吉田格コレクション—」を見に来ました。いろいろな縄文土器や石器などが見れて良かったです。
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・特別展で初めて来ました。こんなに縄文土器や石器が大学博物館にあるとは知りませんでした。
(県外・大学生・18歳男性)
- ・展示資料の多さに驚きました。大学で調査したものだけでも膨大な量なので感心しました。
(県外・大学生・19歳男性)

- ・梵鐘がこんなにも展示されているところは初めて見ました。梵鐘といっても国によって違うことがよくわかりました。
(県内・一般・30歳男性)
- ・大学の校内なので一般の人が入って良いのか戸惑いました。
(県内・一般・30歳女性)
- ・第5回特別展を見に来ました。これまでに見る機会の少なかった吉田格コレクションの全体がよくわかりました。
(県外・一般・40代女性)
- ・第5回特別展を見に来ました。花輪台貝塚や城ノ台貝塚など、これまで展示されていなかった資料を見て満足しました。
(県外・一般・50代男性)

利用案内

所在地：〒360-0161
埼玉県熊谷市万吉1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
開館日：月・水・木・金・土曜日
(大学休業中を除く)
開館時間：10:00~16:00
*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あとかぎ

館報『万吉だより』も本号で10号となりました。前号のあとかぎでは新校舎が建築中になっていましたが、新校舎も完成し新入生たちを迎え入れるばかりです。熊谷は桜の名所でもあり、毎年熊谷キャンパスも桜で満開の春を迎えます。博物館も少しずつではありますが、より良い展示が出来るように努力していきたいと思っております。

(内田)

題字揮毫 田淵観斎(立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第10号
平成21(2009)年3月31日発行
編集・発行 立正大学博物館
〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
e-mail: museum@ris.ac.jp
http://www.ris.ac.jp/museum/index
印刷 光写真印刷株式会社